

ぞうれっしゃがやってきた～

2025年
戦後80年

平和の願い 歌い継ぐ

太平洋戦争を生き延びた動物園のゾウにまつわる合唱組曲「ぞうれっしゃがやってきた」のコンサートが22日、埼玉会館(さいたま市浦和区)で開かれる。ステージに立つ「川口ぞうれっしゃ合唱団」(川口市)は平和への願いを込めて30年以上、歌い継いできた。戦後80年の節目の今年、特別な思いを胸に練習に励んでいる。

(福田真悟)



「もっと笑顔で!」「出しの言葉は力を入れて」
5月下旬、川口市の芝西中学校陽春分校。本番が近づく中、指揮を担う東京芸大指揮科教授の酒井敦さん(63)の指導が、熱を帯びる。それに応えようと、3歳～90代の団員が力を振り絞り、元気な歌声を響かせた。

全11曲の「ぞうれっしゃ」の舞台は、名古屋市東山動物園(現東山動植物園)。太平洋戦争末期、全国の動物園で軍の命令による動物の殺処分が進む中、当時の園長らが2頭のゾウを守った。戦後、子どもたちの「ゾウが見たい」との願いに応える名古屋行きの特別列車が仕立てられ、夢と希望を与えた。

そんな実話に基づく作品は、戦争の悲惨さとともに、平和な世界を生きた喜びをうたいあげる。合唱団代表の荒木紀理子さん(70)は「信条や立場に関係なく、『戦争は嫌だよね』という点でみんなが

つながれる」と説く。

1990年の結成以来、合唱団は翌年から2年に1度のペースでコンサートを開いてきた。公演ごとに募集する団員の数は、延べ5千人以上。練習場所に近い芝園団地に多く住む外国籍の住民を含め、さまざまな人が輪に加わってきた。

今回も150人ほどの団員のうち、半分ほどが初参加となる。その一人、台湾出身のリー・チェンワンさん(36)は「3歳の娘が歌うのが好きなので、一緒に参加しようと決めた。作品のメッセージはと

元気な歌声を響かせる子どもの団員ら



川口の合唱団が22日コンサート

世界では、ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルのパレスチナ自治区ガザ侵攻など、戦火が絶えない。国内でも、外国人への差別をおおるような言動が交流サイト(SNS)を中心に広がる。

荒木さんは「戦後80年の節目となるが、これが100年、200年と続く通過点になるよう、祈りを込めて歌いたい。聴いてくれる人々とともに、平和の大切さを分かち合える場になれば」と意気込む。

6回目の指揮に臨む酒井さんは「昭和100年の節目でもある。その時代に起きた事実を風化させない機会は大切」と強調。大事なフレーズに、ラストを飾る曲「平和とぞつと子どもたち」の中の一節を挙げる。

人間の命をいづくしむ心を動物の命をいづくしむ心を子どもたちよいつまでも忘れないでほしい

「合唱が終わってからもうつと、子どもたちの心に残れば」と願う。

公演は22日午後5時から。第一部が「打花打火(だかだか)」のパフォーマンスで、第二部に合唱を予定する。入場料は1500円。詳細は、HP(「川口ぞうれっしゃ」で検索)に掲載。問い合わせは、荒木さんへ電話048(268)9256(夜間のみ)へ。